

「他者との学び合い」を創るオンライン授業（遠隔合同授業）

— 小学部1年生国語科の事例 —

本実践は、遠隔合同授業を活用して子供同士で学び合う環境を確保するとともに、「話すこと・聞くこと」に着目した指導を行った。特別支援学校では、学習集団が少人数であったり固定化しやすかったりする環境であることから、対話が十分になされず、思いや考えが深まりにくいという課題がある。本実践では、遠隔合同授業による学習集団の広がりという利点に着目し、国語科の見方・考え方を働かせ、児童が自覚的に言葉を使い、対話ができるように指導の工夫を講じた指導を行った。互いについての既知の情報が少ない児童が共に学ぶことにより、言葉を選び伝えようとする様子や、相手の話に思いやりを持って聞いたり共感したりする姿が見られた。このことから、学び合いを通して、児童自身の伝えたいという思いや相手のことを理解したいという思いが高まり、「言葉による見方・考え方」が働き、資質・能力をよりよく身に付けることにつながるのではないかと示唆が得られた。

I. 問題提起と目的

現行の学習指導要領では、資質・能力の育成に向け「主体的・対話的で深い学び」の実現やこれらの視点での授業改善が求められている。

一方、筑波大学附属桐が丘特別支援学校（以下、当校）で学ぶ児童においては、少人数で固定された人間関係の中で、話さなくともお互いのことが把握できることが日常となりつつあり、友達の考えをしっかりと聞いたり、友達と話し合ったりすることで新たな気づきを得たりする機会が乏しい様子が見られる。（木村（2023）p8 - 14）

これを踏まえ、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて遠隔合同授業を活用し、「学び合う」環境を確保するとともに、人との関わりの中で伝え合う力を育むために指導の工夫を講じた小学部国語科の授業を行った。授業について授業者による評価及び児童に対する授業後の口述による振り返りを行い、授業が主体的・対話的で深い学びになっていたか考察する。

II. 方法

1. 対象生徒及び実施状況

(1) 対象学級

①学級の構成

小学部1年生5名（男子2名、女子3名、以下、児童ABCDE）である。小学校学習指導要領に準じた教育を行う教育課程（以下、準ずる教育課程）で学び、基本的には、当該学年の目標、内容で授業を行っている。

②学級の実態

学習に取り組むための場では、授業前に学習用具を準備したり、学習姿勢を整えて座ったりするなど学習に取り組む態度が身についてきている。また、授業においては、自分の考えを伝えようとしていたり、目の前の課題に集中して取り組んだりすることができるようになってきている。

国語科の学習では、いつ・どこで・何をしたかを話すことができたり、話し始めると経験の中で感じたことについて、言葉を紡ぎだしたりすることもできる。個人差は見られるものの、自分の思ったことを素直に発言するなど、意欲的に学習へ臨んでいる。

これに対し先生や友達との会話において、家族を名前で話すなど、普段共にしている友達関係の中で、相手に伝わりやすい話し方への意識は薄い様子が見られる。また、伝わらなかった時に、言葉を言い換えるなどして伝えようとする意識が低い様子も一部児童には見られる。また、日常生活において介助やサポートが得られる環境のため、自ら体験する・試行錯誤することが少なく、動作や取り組みの詳細を覚えていなかったり、経験したこと感想が持ちにくかったりする様子が見られ、他者に分かりやすく伝えるための意識や言葉の用い方に課題がある様子が見られた。

③接続校の学級の構成と実態

福岡県立A特別支援学校（以下A校）の小学部1年生2名（男子1名、女子1名以下、児童FG）である。準ずる教育課程で学んでおり、基本的には、当該学年の目標、内容で授業を行っている。自分が経験したことや興味のあることを伝えたいという気持ちが強くある一方で、自分の話を中心に会話が展開されることが多い。そのため、相手の話に興味を持って聞いたり、積極的に質問したりする姿が少なく、やりとりが続かないことが多い。

2. 手続き

前述の通り、7名においては、自ら興味ある話題を相手に伝えたいという意欲を有し、自発的に話すことができる一方で、相手にわかるように伝えるための意識や話し方について学習する必要があるといえる。そのため、日常生活及び国語科における願いを定め、児童が主体的に伝え合う学習を合同で行うことを計画した。

(1) 遠隔合同授業において期待する姿からの単元の検討

①日常生活で期待する姿

学校生活において、気心のわかる仲間のみと会話をしがちであることから、自分の言いたいことを好きなように述べるばかりではなく、相手が興味を持って聞けるための工夫を図ったり、相手の話に興味を持って耳を傾ける姿勢を身に付けたりしてほしいという願いを両校の担任が考えていたことから、以下の3点を定めた。

- ア 話したり聞いたりして、人との関わりを深めようとする姿
- イ 相手の話に思いやりを持って聞く姿
- ウ 相手の話に共感する姿

②国語科で期待する姿

国語科においては、相手と有意義な会話を重ねることができるための話題の選定、自分の思いや考えを伝えるための言葉選びができる等の指導が特に重要と考えたため、以下の2つを期待する姿とした。

- ア 話題を選んで、言葉で伝えようとする姿
- イ 相手意識を持ち、伝わりやすい話し方や表現方法をしたり、相手の話に興味を持って聞いたり、質問をしたりする姿

7名が日常から話題にする話したいことのなかで、比較的多く示されるものの一つに、土日の学校休業日や長期休業の出来事があった。この話題の場合、大抵は一人一人話題が異なるために、より相手を意識した言葉の選定をしなければ伝わりにくいと言える。また、経験値が少ない肢体不自由児であるからこそ、自分の経験したことは、より実感を持って言葉にしやすいのではないかと考えた。また、正しく伝えるのみならず、自分が伝えたいという思いを持ち、そのためにはどのような言葉を使って伝えれば相手に伝わりやすいのかを意識することにもなる。

そこで、単元については、長期休業や土日の出来事を継続的に伝えることを題材とした単元とすることとした。

(2) 単元の設定

①単元名

小学部1年生国語科
「休みの日の話をしよう」

②学習指導要領上の位置付け

「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編」
第1学年及び第2学年

2(1) 内容「A 話すこと・聞くこと」

〔思考力、判断力、表現力等〕

- ア 身近なことや経験したことなどから話題を決め、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと
- イ 相手に伝わるように、行動したことや経験したことに

基づいて、話す事柄の順序を考えること

③単元の指導目標

・身近なことを表す語句の量を増し、話の中で使うとともに、語彙を豊かにすることができる。

〔知識及び技能〕(1) オ

・相手に伝わるように、行動したことや経験したことに基づいて、話す事柄の順序を考えることができる。

〔思考力、判断力、表現力等〕A(1) イ

・話し手が知らせたいことを落とさないように聞き、話の内容を捉えて感想をもつことができる。

〔思考力、判断力、表現力等〕A(1) エ

④評価規準

・身近なことを表す語句の量を増し、話の中で使っていると同時に、語彙を豊かにしている。

〔知識・技能〕((1) オ)

・「話すこと・聞くこと」において、相手に伝わるように、行動したことや経験したことに基づいて、話す事柄の順序を考えている。

〔思考・判断・表現〕(A(1) イ)

・「話すこと・聞くこと」において、話し手が知らせたいことを落とさないように聞き、話の内容を捉えて感想を持っている。

〔思考・判断・表現〕(A(1) エ)

・進んで、相手に伝わるように話す事柄の順序を考え、学習の見通しを持って話そうとしている。

〔主体的に学習に取り組む態度〕

⑤単元計画

表1の通りである。なお、全6時間を遠隔合同授業として実施した。

表1 単元計画

学習内容	時数
1. 休みの日の出来事を話すという学習の見通しを持つ。	1
2. 休みの日の出来事を想起し、友達に話したいことを選ぶ。	3
3. 冬休みの出来事を想起し、友達に話したいことを選ぶ。	2

⑥実施時期

遠隔合同授業の実施状況を表2に示す。「休みの日の話をしよう」の単元における遠隔合同授業の実施は、○で囲んだ部分である。なお、両校の子供同士がより積極的に関わりを持つことができるように、自己紹介や一緒に遊ぶ特別活動を1時間、互いに好きな本を紹介し合う国語科の時間を実施前に2時間実施した。

表2 年間の実施状況

	8月	9月	10月	11月	12月	1月
事前打ち合わせ	→					
自己紹介			■			
一緒に本を読もう			■			
休みの日の話をしよう				■	■	■

(3) 遠隔合同授業の実施手続き

①接続校との打ち合わせ

遠隔合同授業について、実施予定の2校の教員で打ち合わせを行った。各校の児童の学習上の課題などの実態や障害の状況を確認し、ねらいや指導上配慮が必要なことについて確認を行った。

遠隔合同授業を実施する前に単元や授業について手立ての確認や使用機器についても確認を行い、互いの学校の様子を把握しつつ情報共有を行った。また、当日の流れ、教員の動きや役割について、児童の活動や支援することなどの確認を行った。その他に、当日を迎えるまでに、メールにて指導案を送り合い、授業について共通理解を図った。

今年度の遠隔合同授業を行う際の1回目から3回目の授業は、それぞれの自己紹介や互いに好きな本を紹介し、一緒に読み聞かせを行う授業を実施し、単元内で児童同士が互いに興味関心を持って対話を深めていけるよう、素地を作った。

②遠隔合同授業の実施

小学部第1学年であることを考慮し、単元内全授業時間を全て接続することとした。対話できる時間を十分確保できるよう配慮した。また、児童がほどよい緊張感を持ち、より伝えようとする意識を高められるよう、メインティーチャーとサブティーチャーを交代する授業を設定した。全6回の授業のうち、4回は当校教員がメインティーチャー、2回は相手校教員がメインティーチャーを行うこととした。

③授業の記録

授業の記録については、Zoomの録画機能を使用し、当校でとった。遠隔合同授業実施後の自己評価として、双方の児童に教員から質問し、発言を録画や口述筆記を行う形で振り返りを行った。

(4) 授業後の振り返り

授業後は、口述の振り返りを3項目において行った。児童によっては、具体的な言葉が出ない項目があったり、諸事情により振り返りが行えない回があったりした。また、振り返りの記述については、当校のみの記述である。質問事項は次の通りとした。

- ①遠隔合同授業は楽しかったですか。
- ②どんなことが楽しかったですか。又は、楽しくなかったですか。
- ③次の授業で何かこうしてみようということはありませんか（6回目を除く）。

Ⅲ. 結果

1. 授業の様子

特に第4時間目については、児童同士で友達の話した出来事を自立的に補足し説明したり、質問したりする中で、言葉の意味や言葉が持ちメージを膨らませていくやり取りが見られたため、一例に挙げて検証する。(表3)

(1) 第1～3時間目

自分の話したい話題を決めたり、自分の経験したことを順序通りに話したりする様子が見られた。初めは、互いの様子を気にして、遠慮がちに話す様子が見られた。また、声のトーンが小さめであったり、友達が話したことに対して、身振りなどのアクションが控えめだったりする様子が見られた。しかし、第2時間目、第3時間と時間を重ねるごとに互いに積極的に話したり、質問したりする様子が見られるようになった。

(2) 第4時間目

伝えたい出来事を全員が持ち、1～3文程度で簡潔に伝える様子が見られた。友達の話した出来事を自立的に補足し、説明する様子が見られた。また、友達同士で質問したり説明したりする中で、言葉のイメージを膨らませ、納得する姿が見られた。普段は見えない話を聞くことで、新しい友達像を発見し、楽しみ、より深く知ろうとする姿があった。

そこで、第4時間目の児童C、児童E、児童Fの報告を取り上げ子供同士の言葉のやり取りを一例に挙げる(表3～5)。

児童Cが発表したのは、人気テレビ番組の『笑点』についてである(表3)。「笑点」の話の中に出てくるわからない言葉をきっかけに、自覚的に友達の補足をしたり、説明したりするなどして、児童同士が対話を行った。これをきっかけに、児童が持つ言葉を自ら引き出しながら、他の言葉に言い換えるなどして疑問を解決し、納得していく様子が見られた。

続いて、児童Eは夏休みの出来事として動物園に行き

パンダを見たことについて、自分の行動とともにその理由を交えて話すことができた(表4)。また、話題にあがったパンダ以外の動物がいたのかという質問に対しては、パンダしかしっかり見ていないためによく覚えていないという事実を説明する様子が見られた。相手校の児童とも素直に発言できる友達関係を築いていることが感じられた。

また、児童Fは、夏休みの旅行の思い出について述べた(表5)。「えび天ってなに?」という質問に対して、児童が持つ言葉を自ら引き出し、答えた言葉に更に説明を加えるなどして懸命に伝えようとする姿が見られた。

子供たちは時に身振りも交えながら、上記の3つの話題について自分の伝えたいことを表現することができた。また、聞き手の子供たちも話を聞いて分からないことを聞いてみようという姿勢が顕著に見られるようになった。

(3) 第5～6時間目

メインティーチャーとサブティーチャーを交代し、A校の授業者を中心に授業を展開した。児童は、ほどよい緊張感を持ちながらも、全授業遠隔合同授業を行ったことで、接続校の教員にも親しみが生まれ、笑顔で授業に臨む様子が見られた。授業が始まる前から、「〇〇を話すんだ。」「〇〇と〇〇どちらを話そうかな。」「友達はまた電車の話かな。」などというつぶやきが聞かれた。冬期休業を挟んだことで、休みの間の出来事を友達に伝えたいと積極的に発言していた。また、接続校の教員や友達に伝わるように、言葉を選びながら考えて伝えようとする様子が見られた。

表3 テレビ番組の話

発話者	発言内容
児童C	「しょうてん」 ちょっとだけらいしゅうのところを見て、 ぜんいんざぶとんを9まいゲットするところ を見ました。
授業者	きいてみたいことはありますか。
児童B	しょうてんってなに。
児童E	らくご?
児童C	そう、らくご。
児童E	らくごってというのは、なんかおもしろいこ とをする。
教員	らくごって知っている? らくごって何?
児童C	おもしろい人にざぶとん1まいか2まいあ げるの。
児童F	まあまあおもしろいと思ったらあげない で、あんまりおもしろくないと思ったら とっちゃう。
児童F	しらなかつた。
児童E	テレビのたしか4チャンでやってるよ。
児童C	テレビの4チャン,5じ25ふんにやってる。

児童A	ざぶとんってなに?
児童C	ざぶとんは、まくらみみたいなやつ。
児童B	すわるやつだよ。
児童C	うん、そう。
児童E	しょうてんのざぶとんは、むらさきいろな んだよね。このくらい。(身振りで大きさを示す)
児童C	むらさきいろと白。

表4 夏休みの話(動物園)

発話者	発言内容
児童E	「なつやすみのはなし」 わたしは、どうぶつえんにいきました。中 のパンダを見ようとしたら、2人だけしか 中に入れなかったから、そとのパンダを見 ました。そのとき、3人でいったから。
授業者	きいてみたいことはありますか。
児童F	どうぶつっていたの?
児童E	どうぶつは、いた。
児童F	なんのどうぶつ?
児童E	それは、パンダしか見ていないから、ちょっ とわからない。わからないっていうか、 わすれちゃった。
児童A	ぱんだって見たの?
児童E	見たよ。
児童A	なんひきいたの?
児童E	2ひき。
児童A	オッケー。(両手で○の形の身振り)

表5 夏休みの話(旅行)

発話者	発言内容
児童F	「りょこうのはなし」 ともだちともだちと、ともだちのおとう さんとわたしのともだちのママと、と、お ねえちゃんとおねえちゃんとおにいちゃん とパパとママとりょこうにいきました。中 のおふろなのに、さむかったです。あさご はんをたべおわたあとに、ももグミをた べました。みんなでたべました。あさごは んは、サーモンとからあげとえび天です。
児童C	えび天ってなに?
児童F	えびだよ。本ものの。本もののえびだよ。
児童C	オッケー。(両手で○の形の身振り)
児童A	おねえちゃんとおにいちゃんは、なん年生 なの?
児童F	おにいちゃんは3年生で、おねえちゃんは、 5年生で、もう一人が中学2年生だよ。
児童F	オッケー。(両手で○の形の身振り)

2. 授業の評価

他校の児童と学び合い、休みの日の出来事を発表し合うことにより、普段は会わない友達に伝えたい、そのためどのような言葉を選び、話すのか、児童が自ら言葉

への意識を高め、伝えることができた。分からないことを質問することで、限られた言葉でも、相手の反応を見ながら、自ら言葉を引き出しながら話すことができた。言葉への自覚が育ちつつあると評価した。

3. 授業後における児童への聞き取り

(1) 遠隔合同授業は楽しかったですか。

(2) どんなことが楽しかったですか。又は、楽しくなかったですか。

(3) 次の授業で何かこうしてみようということはありませんでしたか。

IV. 考察

1. 「学び合う」場面から見られた児童の変容

(1) 話題を選び、伝えようとする姿が見られたこと

7名それぞれの児童は伝えたい出来事を簡潔に伝えることができていた。また、学級の仲間同士だけではなく、遠隔地の児童にも伝えたいという思いを持って出来事を選び、簡潔な言葉で発表することができた。普段は会わない遠隔地の友達に伝えたい、そのためにはどのような言葉を選び、使うのか、考えて発言する様子が見られた。

(2) 相手意識を持ち、伝わりやすい話し方や表現方法をしたり、相手の話に興味を持って聞いたり、質問をしたりする姿が見られたこと

7名それぞれに、友達が話した出来事を落とさないように聞き、事柄の中から、分からないことや質問したいことをやり取りしながら聞くということを繰り返し行うことで、子供自身が持つ言葉を自ら引き出しながら、相手に伝わるように言葉を言い換えるなどの工夫を図りながら話す姿が見られた。そのことから、児童が言葉に対する意識を高め、言葉への自覚が育ちつつあると言える。

また、うなずきながら話を聞く姿も見られ、友達の話に共感する姿が見られてきた。

2. 授業後の振り返りから見られた児童の変容

全6回の授業後に口述で振り返りを行った。「1 遠隔合同授業は楽しかったですか。」との質問には、全員の児童が楽しかったと発言した。「2 どんなことが楽しかったですか。又は、楽しくなかったですか。」には、「友達と話せて楽しかった。」「遠くの〇〇さんとしゃべって楽しかった。」「自分が話せてうれしかった。」「質問ができたこと。」「自分の好きな電車やバスの話が出てきておもしろかった。」との発言があった。児童は、総じて楽しいという気持ちを持ち、意欲的に授業に参加していたことが示された。また、自分の話を伝えることができたことや分からないことを質問することができた成就感を

持って授業に参加できていたことが把握でき、遠隔合同授業が一定の成果があったと思われる。

「3 次の授業で何かこうしてみようということはありませんでしたか。」との質問には、「もっと話してみたい。」「次の休みの日の話は何にしようかなって。」「次に話すことはもう決めてる。」「もっと話したい。」「分からないことを聞いてみたい。」との回答があり、次の授業に自ら学び合いの視点を持ち、振り返りを行っていることが示された。

一方、授業後で聞かれた感想の中では、「声が聞こえなかった。」「話を聞けなかったところがあった。」との思いが聞かれ、遠隔合同授業をする際の配慮事項として、児童が声が聞きにくいなどのストレスを持つことがないように、通信環境や音響設定等に配慮すべきであることを授業を重ねるごとに、児童の発言から感じた。

日常生活の場面では、遠隔合同授業内だけではなく、遠隔地に友達ができたということ喜び、互いに年賀状を送ったり、手紙を送ったりして交流したいという気持ちの高まりを感じた。

遠隔合同授業を通して、国語科の授業だけではなく、人との関わりを深めようとする姿が見られるようになった。

国語科の見方・考え方を働かせ、児童が自覚的に言葉を使い、対話することを重ねていくことにより、児童自身言葉を選び伝えようとする様子や、相手の話に興味を持って聞いたり、共感したりする姿が見られた。学び合いを通して、児童自身の伝えたいという思いや、相手のことを理解したいという思いが高まり、「言葉による見方・考え方」が働き、資質・能力をよりよく身に付けることにつながったと考える。

3. まとめ

特別支援学校（肢体不自由）において、特に準ずる課程の各教科の指導の場合、少人数の学習集団となるため、対話的な学びを効果的に実施することが非常に難しいといえる。そのため、遠隔合同授業という手段は、学習集団の人数を増やし、身近な仲間以外の人と対話することを可能とする。

また、子供たちが暮らす地域とは異なる環境や言葉遣いの相手と対話は、自分たちの身近にない言葉や事象・話題を知るきっかけともなり、語彙の広がりにも寄与するとも考えられる。語彙の広がり、言葉を知ることとともに、相手や場面によって使い分ける力であり、この力は子供自身による能動的な対話が継続されることで育まれる側面があるといえる。

国語科における遠隔合同授業の活用は、多様な相手とコミュニケーションの力を高めるとともに、語彙の拡充を通じて、言語環境を整え向上するための指導方法の一つといえる。

(文責：原 怜子・加藤 隆芳)

V. 引用・参考文献

- 1) 岸田薫 (2017) 岸田薫『言葉による見方・考え方とは』水戸部修治・吉田裕久編 (2017) 平成 29 年版小学校新学習指導要領ポイント総整理 国語, 東洋館出版社
- 2) 木村美佳子 (2023) 『他者との学び合い』を創るオンライン授業 (遠隔合同授業) 筑波大学附属桐が丘特別支援学校研究紀要第 58 巻, pp8-14.
- 3) 文部科学省 (2017) 文部科学省小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 国語編
- 4) 筑波大学附属桐が丘特別支援学校 (2022) 研究紀要第 57 巻